

相場真江（七十四歳）は人生の分岐点で決断した。その先に待っていたのは・・・

平成二十六年五月三十日

群馬県太田市 相場毅正

七十四歳になる母の話聞いた。母とこんな話しをするのは初めてだった。時代と運命に翻弄されながらも懸命に生きて姿があつた。

### ●生い立ち 桐職人の父親と太平洋戦争

相場真江は昭和十五年、太田市で産まれた。古河の桐職人であつた父親が中島飛行場で働くため太田に来ていた。太田には太平洋戦争において日本軍の主力であつた戦闘機やエンジンの多くを作つていた中島飛行場があり、職人である真江の父は戦闘機の内装を作つていた。

戦時中、子どもの頃の食事はさつまいもばかり。時折空から焼夷弾が降つてきた。

### ●おしゃれへの目覚め、そして憧れ

「自分がおしゃれをしたくて洋服を作つてみたくなつた。」目覚めは中二のとき。その後、家庭科で有名であつた館林女子高校へ進み、進学は東京新宿の文化服装学園へ。同期にはコシノジュンコ等がいた。



### ●栄光の人生のスタート

卒業後は足利で洋裁学校の先生になつた。その時、小学校時代の同級生と交際

を始めた。相手は東京で日産の営業マンとしてバリバリ働いていた。足利から東京へ、行ったり来たり、電車で片道三時間かかった。（このへんの便の悪さは今でもあまり進歩していない・・・）  
そして結婚。



東京の石神井に住んだ。近所に撮影場があり、女優さんの衣装を縫つたりした。就職先の洋装店は伊勢丹の下請けもしており、ある日訪問した伊勢丹の担当者と話をしたことがきっかけで、伊勢丹のデザイナーに抜擢された。

東京にて、大手営業マンとデザイナーとでの暮らし。順風満帆、華々しい舞台。

### ●最初の転機 主人の病気 すべての地位を捨てて、主人と田舎太田へ戻る

しかしそれは突然やってきた。頑張りやストレスが災いしたのか、主人が緑内障を患つた。このままでは目が見えなくなるかもしれない。医者からの提案は「転地療法」。究極の選択であつた。東京でこのまま栄光のキャリアを続けるか、田舎へ下るか。

真江が取った選択肢は、なんと、すべての地位を捨てて、主人と田舎太田へ戻ることに。

「健康な男と別れるならまだしも、病気の人を切り捨てられはしなかつたさあ」

●伊勢丹デザイナーという栄光を捨て、向かった先に・・・

「離婚をしても東京に残ってデザイナーを続けて欲しい。田舎に帰るなんてもつたいない！」

上司渾身の引き止め、説得を振り切り、田舎へ下った・・・

●デザイナーとしてのプライド、葛藤  
屈辱

主人の実家に入った。田舎へ戻った真江への仕打ちは甘いものではなかった。

ここではデザイナーという過去の栄光など一切関係なかった。農作業ができないと一人前に認めてもらえなかった。

「なんでデザイナーの私がこんな百姓仕事をしなければならぬのか。」

当時は機械もなく、泥だらけで手作業であった。おしやれもへったくれもなかった。悔しくて泣いたこともあった。当然農作業の経験のない真江は作業が下手であった。ある日、ついに見かねた姑が言った。

「お前は洋裁をやったらいい」

●太田でのキャリアのスタート

近所の人の洋服を縫ったりもして、徐々に周囲からの信頼も得ていった。

ユニー（今はなき太田のデパート。太田の栄枯盛衰の象徴）の中に出店することを勧められた

が、性に合わないと感じ、一念発起、女一人手で、借金し、まちなかに土地を買いブテイ



ック経営をスタート。真江二九歳のときだった。

評判が評判を産み、服は売れた。一時はスタッフを二十人抱えた。

あまりおしやれなイメージはない太田で、当時ファッションショーもやった。

—そういえば、あの世代の婦人には、お洒落にこだわる人がけっこう多いなあ。この太田でも—

●二度目の転機「もうちょっとやれたんだけど・・・」

真江自身が心臓病を患ったことと、祖母の体調も良くなく面倒を見なければならなかったため、苦渋の決断で、まちなかのブティックは閉め、その代わりに、実家の横にブティックを建て、そこで細々と営むことにした。真江五九歳のときである。

実家は昔からの家で土地だけは広くあった。人に来て欲しい、喜んで欲しいという思いから、バラを始めた。理想はイングリッシュガーデン。ちょうどいま、三百年のバラが咲き誇っている。



●結局、産まれたところに帰ってきた

—あの時ご主人が緑内障になっていなかったら、田舎に帰ることなどなく、東京ですつとデザイナーを続けた？—

「そうだね」

—デザイナーをやめるときは悔しかった？執着や、未練もあった？—

「そりやあもう、悔しいなんてもんじゃなかったさ」

不運(?)だったのかな・・・。

「じゃあ、あえていま、もう一度聞くよ。ほんとうはずっと東京で生きていききたかった? それとも、故郷太田に戻ってきた、結果的には・・・よかった?」

「んー。まあ、よかったな」

太田に戻ってきて、主人も体調を取り戻し、第一子も授かった。それからは身体的な要因から三人流産してしまっただが、紆余曲折を経て、四十歳のとき、待望の第二子を授かることができた。さらに、ようやくと、念願の孫の顔を見ることができた。

「抱ける体力が残っているうちに孫が見られてほんとうによかった」



「東京じゃなくて、太田でもいいかなって思えたできごとって、しいて言えばなんかあった?」

「んー。ここ主人の実家には、庭の先に湧き水が流れているでしょ。夕暮れ時に、ふと、ぼつーと眺めていたら、儂い光が、幾重にも、ふわあ〜つと湧き上がってきた。蛍だった。ここでもいいかな、と思った。」

### ●これから

「これからはどうしたい?」

「細々とでいい。心臓に負担にならない程度にね。まあ、いまでも負担はかかってるけどね(笑)」

「人生をファッションに捧げてきたわけ

だよ。今の太田はおしゃれに関して、まったくおしゃれなイメージはないね。やっぱり、おしゃれという価値は、大事なものの?」

「不景気とかなんとか言うが、女性がおしゃれをしなくなったらもつと世の中暗くなる。それにおしゃれは女性が持っている最大の特権であるんだよ。だから、そのために、私が手伝えることはすべてやる。世の中が明るくあつて欲しい」

「まちで美しく生きようと奔走した真江の理念が凝縮された言葉であった。」

### エピローグ

「田舎太田に戻って住むのでもまあいいかな」と思うきつかけとなった、湧き水を、実際に一緒に見に行ってみた。



残念ながら今は蛍が飛ばなくなってしまうようだが、湧水は、こんこんと湧き出ている。あの時と同じように。

この水はどこから来て、どこに向かっているのだろう。またここに戻ってきているようでもある。何か吸い寄せられるように・・・。

「さて、戻って、バラ見ながらお茶でも」「ちよつと待って。あれ、うそ、カワニナ(蛍の餌になる貝)がいるね。へえ〜まだ、いたのか・・・。」

母真江は、家の庭先を流れる湧き水を見て、目を細めるのであった。その流れを、これまでの人生に重ねているかのよう。

「・・・ここで、よかったかな。」